

新刊
紹介

J・D・デイヴィス著
北垣宗治訳

『新島襄の生涯』

(同志社校友会、B6判
二二九頁、一、五〇〇円)

すべての新島襄伝の根本資料であるデイヴィス博士の Joseph Hardy Neesima, 2. ed., 1894 が、明治三十六年七月に山本美越乃訳補『補正新島襄先生伝』として世に出たから、すでに七十年以上の年月が立ち、いまは絶版になっていてほとんど入手できない状態にある。その上に、訳文も古めかしい文語体であって、ルビがつけられてはいるが、今の中学・高校生にははなはだ読みにくく、この古典的名著も博物館的

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

文献となって、忘却の彼方^{かた}に消え去りつつあったのである。これを救ったのが北垣教授の苦心の新訳による『新島襄の生涯』である。

北垣教授は底本にデイヴィスの原書の第三版本(一九〇五年)を用い、これを柔らかな現代口語体に翻訳した。それは『新島襄の生涯』という、かつてこの種の書物に例をみない新鮮な響きをもつ書名で包むに相応しい文体であって、大変に平易で読みやすく、時には少々砕けすぎはしないかと思われるほどで、これが山本訳と同じ原書の翻訳なのか、と疑われるほどである。訳文は原典に忠実かつ正確であって、山本訳にみられるような省略はなく、また訳者の主観的訳補も少ない。補訳が必要だと思われる箇所については、詳細な注の付記をもってした。この新訳における北垣教授の苦心は、むしろこの詳注をつけるための考証上の作業にあったのではないか。なぜなら、デイヴィスの原典の翻訳については、教授の卓越した語学力をもってすれば、大した問題ではなかったはずだから。この註によって、この新訳本が山本訳に較べてどれほ

ど正確に、また解説しやすくなったことか。それと同時に、デイヴィスの原書のもつ古典的意義が改めて評価される途が開かれることになるだろう。教授の果たしたい一つの功績である。そして創立百周年の記念すべき年に、デイヴィスの名著を忘却の彼方から、再び同志社人の手に取り返す機会が与えられたことを感謝しなければならぬ。

この北垣訳は、今後行われる新島研究のための最も権威ある底本として、長く尊重され続けてゆくことだろう。ただそのためには、ごくわずかではあるが、訂正の筆を加えるべき箇所のあることが見落とされてはなるまい。本訳が新しい新島研究の資料上の台本となるものであるだけに、このことは是非なしとげて下さるよう、訳者に希望しておきたい。なおこの新訳を包む装丁については、同志社カラーのクロスを用い、表紙に新島家の家紋がおされていることや、本扉の書名その他のデザイン、それに造本など良好である。

最後に、この北垣訳の『新島襄の生涯』によって、古き山本訳は七十年以上に及ぶ

長く重い使命をようやく終えることになる。私たちはここに改めて山本訳に尽きぬ感謝の念をこめて、これを忘却の彼方へ送ろうと思う。

(志賀英雄・大学文学部教授)

中村 貢著

『デントン先生』

(同志社女子大学、B6判
三三〇頁、八〇〇円)

同志社の教育、特にその女子教育について語られる時に、いつも話題に上るのがデントン先生である。先生はアメリカン・ボード派遣の宣教師として一八八八年に同志社に着任されて以来、事情により同志社を離れた間、何回かの休暇帰米期間を除き、第二次世界大戦中も京都にとどまり、一九四七年に永眠されるまでの約六十年間、ただ一途に同志社の女子教育のために全身全霊を捧げて尽くされたのである。このような同志社女子部とは切っても切れない関係にあるデントン先生の伝記としては、昭和三十年に同志社発行のF・B・クラブ先生にyng "Mary Florence Denton and the Doshisha" があるが、このたび、元同志社女子大学教授で、デントン先生と親交があ

り、特に戦時中の二年ばかりを先生と起居を共にされた中村貢先生によって「デントン先生」が書かれた。著者は本書の執筆のための資料あつめと準備のために、八年近くの年月を費やされ、昨年七月に脱稿、十月に同志社女子大学により発行された。時あたかも創立百周年であり、その時期にこの伝記が発行されたことは、誠によきことばしく記念すべきことである。

本書の内容は、一、カリフォルニア時代、二、ゴルドンとの出会い、三、新世界日本、四、同志社へ、五、元気な先生、六、出町幼稚園、七、鳥取と東京、八、賜暇帰国、九、再び同志社へ、一〇、教授ぶり、一一、皇后陛下ご訪問、一二、信仰者デントン、一三、訓育者デントン、一四、女子医学校建設失敗、一五、性格、一六、非難、一七、ビルダー、デントン、一八、ホステス デントン、一九、榮譽、二〇、戦争勃発まで、二一、戦争時代、二二、終戦と永眠、の二十二章よりなる。どの章もデントン先生の間像を彷彿させるものである。第一章のカリフォルニア時代では、先生のご両親と家族のことや、娘時代の先

生が詳しくえがかれており、第二章では、デントン先生に日本への目を開かせた明治初期の偉大な宣教師ゴルドン氏について述べられている。それにつづいて、四、五、六、九、一〇、一二、一三、一五、一七、一八、一九章などにおいて、先生在世当時の同僚の先生方や、多くの卒業生によって語り伝えられてきた。先生の教授ぶり、働きぶり、その特有の性格、また戦争前後、戦争中の先生の心の動きや態度などが実に適確にえがき出されていて、傑物デントン先生を目の前に見るようである。文章は平易で読みやすく、しかも読み始めれば、一気に読み切ってしまうような気持ちにさせられる迫力ある筆の運びである。

この伝記を通して、デントン先生の生き方が理解されると共に、同志社の歴史もひとつとかれて興味深い。

巻頭には、先生のサイン入りの写真、鹿子木画伯による肖像画の写しと、明治、大正、昭和の学生達と共に写られている珍らしい数葉の写真が収められ、巻末には、著者によって整理された詳しい年譜が付加されている。表紙の内側にはデントン先生の

ご筆跡も収められている。

同志社につながる人々には、ぜひ、一読をおすすめしたい書物である。

(鶴淵邵子・女子大学教授)

久永省一著

『同志社で話したこと』 書いたこと

(洛北書房、B6判
三四九頁、七五〇円)

この書は恩師久永省一先生が同志社に学ばれ、同志社で教え、また同志社中学校長としての御経験のなかで、おりにふれて思いをまとめられ、書きつづけられた美しい、そして心あたたまる、珠玉のような文章のあつまりである。

大正四、五年の、遠い、もともと同志社らしい時代の記録からはじまる。それは同志社中学のラグビー部や野球部がかがやかしい戦勝をかざり、今では神話化されている甲子園出場のはなやかな時代であった。少年久永先生の得意満面、同志社人の誇りがあふれている。

幼い頃の先生の心は、そのお人柄をやとすに十分な、多感で清純なものであった。

「寺町二条に菓子屋があった。店先のお菓子の入ったガラスのわくに手を置いた。そっと手をのせたつもりなのにピッチと音がした。五、六本の線が火花のように散った。ガラスにひびが入ったのだ。」子供はこわいおそろしい思いで「はいになった。この思い出は私たちの心をうつ。こうして先生は人間としての苦悩と不安をその成長のなかに深化され、また身体的にも病弱の重荷をおわれるのである。それと同時に同志社も悲慘な時代にのめりこんでいくのである。同志社中学由良キャンプの由来は同志社の歩んだくるしみと、同志社を守りぬいた先生方の雄々しい記録なのである。」

先生の文章は一つ一つ心にひびく。私は中学生時代、先生の英訳を聞いた教室の情景を昨日のように思い出す。先生は教卓の前にすわって、あのやさしい温顔と、あたかい、そしてやや大きめの声をあげてホーソンの小品を訳出されていた。先生の言葉に聞きほれながら、私たちは文学の世界に酔い、どれほど不思議の世界にひきこまれていたことか。この随筆集も先生の美しい心とことばにあふれている。

「その日のま夜中に、北寮の舎宅で父と私は彰栄館の鐘が鳴りひびくのを聞いた。私はすぐ服を着て家とび出した。同志社の構内から赤い炎がふきあがっている。方角から考えて神学館か有終館だと思った。西門のところきてみると、おどろいたことにX大学の学生たちが銃剣で武装し、わたしたちをなかに入れてくれないのである。かれらは御所の守護者たることを自認し、たとえ他校でも変事があった場合それを守るのが任務だと心得ていたのかも知れない。しかし私たちは自分たちの学校が他校の学生によって守られていることに……」

先生は無条件に同志社を愛され、そこに、先生の言いしれぬやるせなさを直感する。先生は晩年、世界旅行に出られて多くの人々にあわれた。そして「みんなよい人、みんな兄弟、みんないい人、世界は一つ」と述べられる。先生はしずかな愛情の人である。先生は同志社を愛し、生徒を愛し、御両親、御家族を愛された。この書のなかに私は美しく強い同志社人の存在を見る。先生の御健康と御活躍を祈ります。

(松山義則・大学長)